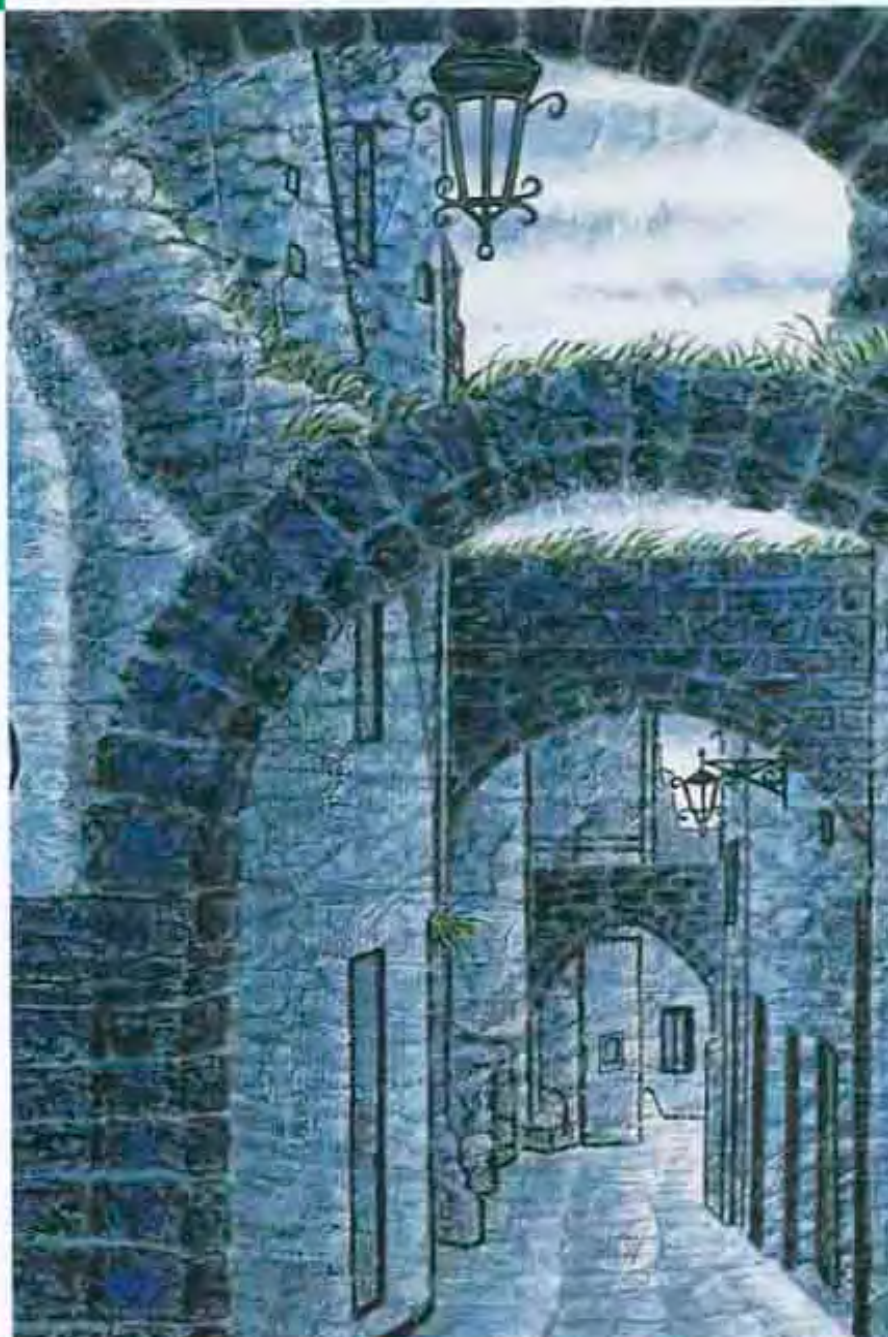


上

9
2017

第9卷第9期



凱

歌

能村 研三

今年の蟬

先日、「天声人語」に蟬の話が載っていた。芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蟬の声」の蟬は何蟬かという話で、歌人の斎藤茂吉は威勢よく鳴くアラゼミだと主張、独文学者の小宮豊隆はニイニイゼミ説を唱えた。結局は斎藤茂吉が降参するかたちでニイニイゼミ説に軍配が上がった。

帰省子に木理するどき家戸口
箱庭をガリバーまたぎしてをりぬ
覚えなし胸もとにある百合花粉

お風入古書肆に鍵のかかる柵

たくさん集めてもそんなに気持が悪いものでもなく、胎色の抜け殻がきれいであった。

わが死後は空蟬守になりたしよ

この句は大木あまりさんの句だが、この句を評した土肥あき子さん

白靴の男朗々暗誦詩

土用草わし掴みては薙ぎ払ふ

疾走の一艇のあと秋立てり

晩夏なり男料理の砂時計

向日葵の林立凱歌奏ぶごと

登山小屋碍子頭はに寝まりけり

の文章にこんな一節があった。ある女性詩人の依頼で、その一人暮らしの部屋に入ると、玄関に駄菓子屋さんで見かけるような大きなガラス壺が置かれ、キラメル色の物体が七分目ほど詰まっていた。それが全部空蟬だと気づいたとき、あまりの驚きに棒立ちになってしまったのだが、彼女は涼しい顔で「かわいいでしょ。見つけたらちようだいね」と言つてのけ、「抜け殻はこの世に残るものだから好き」と言つたという。蟬の一生は地中で七年、地上に出てきて七日ともいわれている。折角地上に出るために地中籠りをしていたのに、今年の八月の地上は雨が降る日が多く、蟬にとつては災難の年であつたようだ。それにしても、あれだけ蟬の殻がいた我が家に例年より蟬の声が少ないのは、啞蟬ばかりだつたのか、雨で鳴く事を慎んだのだろうか。

能村 研三

蒼茫集



三角に

楠原幹子

螢火に自づと声を潜めけり
茅花流し梵鐘の音のたをやかに
採血のてのひら開く半夏生
ナイターの万の同志と狂^ふれてをり
万緑や目印のなき曲り角
八月六日折紙をまづ三角に

スイッチバック

矢崎すみ子

* スイッチバック 緑雨に濡れて戻りけり
牛の名は「コルネ」五月の農学校
大人しく爪切らす牛青山河
エメラルドグリーンの森遠郭公

日に触れし枝六月の花白し
草原のあをき曼陀羅露涼し

裏通り

安居正浩

* 子子の子子といふ動きやう
時計草郵便局は裏通り
蜜豆の好きな男も年をとる
夏雲や水が歴史をつなぐ村
仏具屋のかたまつて在る日の盛り
葛切を食べ悪病の機嫌とる

螺旋

辻美奈子

* 文字摺の螺旋をひとつづつ登る
ほそほそと蠓螂の子の透けてをり

みんなまだ蓄でハイビスカスの鉢
怖いものなしビジュースの夏
向日葵や長電話とは懐かしき
八月某日ダイソーのゴム草履

同じ貌 渡辺輝子

閑古鳥耳そば立てて聞き入りぬ
目薬を注し忘れたる日かみなり
駆け出せば追ひかけて来る夕立かな
夕鐘の涼しき余韻をんな坂
* 同じ貌して子蠅の出るは出るは
かなかなや手漉き和紙なる墨のり

返信 千田百里

巴里祭衛士はいつも遠目して
衝立のやうなマンション大夕焼
* 日傘くるくる靴が鳴るなる誕生日
土間敷を下見に来たる羽抜鶏
酒送りませうか黄泉の夕涼み

返信の五文字とは涼しすぎないか

破調 森岡正作

羽抜鶏跳んで四五歩を省略す
炎天を西郷どんのやうに行く
* 幾万の蟬を聴きあふる磨崖仏
破調から破調へ高む黒揚羽
廁まだ裸電球鮎の宿
神輿舁く手に念力の酒を吹き

大暑 宮内とし子

炎天や近道出来ぬ大手町
* 祝熊吉二郎さん
羅に意欲の透ける受賞の日
万緑や古代を語る石の形
葭障子北山杉の風細し
容赦なき子供の一平甚平翁
* 厚肉に網目をつける大暑かな

白絵具

吉田政江

奔放とはほど遠く生き生ビール

*白絵具絞り出すなり日雷

子育てや向日葵のいまどつち向き

眠さうな鶏と目が合ひ暑氣中り

暑氣払ひノンアルコールの幹事役

一瞬に賭け花火師の天深し

掌中の珠

秋葉雅治

*掌中の珠と愛でをり水中花

サングラス妻とも知らずすれちがふ

ウインドーにこつと鏢の音夏帽子

手花火のひと生の果ての火玉揺る

あぢさゐの晩年といふみだれやう

歴代の抑圧に耐へ籐寝椅子

オルガンもピアノも

荒井千佐代

洗濯物一と日揺れある新樹かな

病人に外出許可や麦の秋

*種袋振れば近づく波の音

死の迫る猫が家出る茅花かな

露天湯より対岸の阿蘇みなみかぜ

オルガンもピアノも弾かず茄子植ゑて

白昼の眩暈

林 昭 太

アイロンの蒸気ゆたかに梅雨に入る

けふ夏至のビニール傘の匂ひたつ

これ以上絞れぬタオル絞り夏

*噴水や風変はるとき音変はる

電線の影のみが影真炎天

白昼の眩暈を連れて黒揚羽

秘密基地

甲州千草

夏休みすでに大樹の秘密基地

*合歓散りて刺繡ぼかしの沼の面

雷兆す下ごしらへの菜ころこ

ケイタイのオーロラ覗く短き夜

神谷バー出でて紛るる夜のみどり

詩の道祝・熊鷹様の豊かなる歩や月涼し

水の笑ひ声

田所節子

* 太陽に仕へしけふの髪洗ふ
伽羅路や経験が知恵育てたる
母のまた昔語りや豆ご飯
泉湧くかすかに水の笑ひ声
岩すべる光幾すぢ作り滝
「あれ」「それ」で分る涼しき仲間かな

起立・礼

頓所友枝

十葉の海の中なる異人館
墓歩めば気力生まれけり
夢多き少年棋士や朴の花
* ペンギンの起立・礼する夏休
深呼吸ひとつしてより炎天へ
山頭火に歩けどなれず冷奴

水馬

小山田子鬼

流さるる沈思のときを水馬
何ごともなくて老いゆく更衣

* 空蟬のきれいに命抜けゐたり

曝さるる恥かしき書を裏返す
天瓜粉孫の動きに応へゐる
太陽とひとり語らふ田草取

待つ

松井志津子

中村大権俳諧日本寺一句

紫陽花の寺苑水中行くごとし
学僧の泪あぢさゐ薄浅黄
滝壺に奈落見て来し枝浮かぶ
揺り椅子に心を均す遠郭公
* 蟻地獄「待つ」を形になすとせば
夜の簾個人情報洩れてます



潮鳴集



問答歌

井原美鳥

夕蚩楯の木の抱く田の祠
くぐもれるインコの人語日の盛
吊忍床屋に革の椅子ひとつ
竹咲くやふつと憶良の問答歌
*遠雷や開けつ放しの鈎括弧

普段

菊地光子

*言ひ分けをさうかさうかと冷蔵庫
雲の峰普段あけたりしない窓
目札にしぼし涼しさ貫ひけり
冷し酒無冠の父の胡坐かな
炎帝に見つめられたる背の縮み

風の道

七田文子

衣更へて怠け心を脱ぎ捨つる
雲梯に大きく足を蹴りて夏
昇進も停年もなく海月かな
三伏の五臓に浸みる沢煮椀
*甚平着て肌に生るる風の道

もりそば

高木嘉久

プレミアムフライデーとか蟻の列
風の日は純白もある著莪の花
*白シャツやミルクスタンドあるホーム
緞帳を開くごとと去る夕立雲
もりそばがメニューの端で呼ぶ溽暑

佇みて

栗原公子

* 佇みて万緑といふ無音界
空の深さ沈めて青き夏の湖
梅雨寒や一点灯る煙草の火
蟻の列「休め」の指令ありやなし
香水一滴あと戻りもうできず

十二使徒めく

内山花葉

樽ワイン十二使徒めく夏至晚餐
沛然と鳩の浮巢をたたく雨
* がうがうと梅雨滝全身重くなる
空家とは枇杷熟るるまま落つるまま
玄海灘の孤島涼しき遺産なる

星のドーム

本池美佐子

風薫る真白き画布の反射光
* 天道虫星のドームを開きけり
尾長来て渡る新樹の枝と枝
待ちたるも掛かるもいのち蜘蛛の網
行々子大利根の風豊かなり

痕跡

藤代康明

月山へ一矢を放つはたた神
長生村烏骨鶏の声畑返す
大黒屋の惜しき暖簾や朴の花
起重機の起重機を吊る真炎天
* 安田講堂の痕跡にしむ蟬しぐれ

虹の零れ

諸岡和子

無声映画のちよこまか歩き夏休
グラジオオラス持論曲げれば折れやすき
* 夏負けて手足の長くなつてをり
類想の水輪てふ枷あめんぼう
水やりの虹の零れを蜥蜴過ぐ



飛鷹選評



能村 研三

夜濯や昇段決めし 柔道着 古居 芳恵

柔道の昇段試験に合格した息子が帰ってきた。毎日の朝練があり厳しい稽古も辛かったようだが、昇段できたことを家族皆で喜びを分かち合った。早速、汗にまみれた柔道着を明日の稽古に間に合うように夜濯ぎをした。家の中に干された柔道着も何か誇らしげにみえた。子どももの活躍を温かく見守る母親の愛情である。

裏山の風のもてなす 夏座敷 茂呂 昇平

今の世の中で「夏座敷」と言っても中々想像しにくい。現代の都会にある家では窓を広く開け放ったりして風通しをよくすることもできない。田舎の大きな屋敷では、廊下の戸をすべて開け放ち裏山から風を通した。何よりのもてなしである。

帆船の連なるやうな 白菖蒲 稗田 寿明

初夏の日差しを受けてひときわまぶしい、真つすくな葉と茎の上に白い花が咲く姿は優雅で気品があり涼しげに感じる。菖蒲田の畝に連なり咲く白いはなびらがそよぐ姿はまるで帆船を連ねているようにも見えた。

朱夏や松三百年の枝を張りぬ 須賀ゆかり

東京汐留にある「浜離宮」の庭園の中には、「三百年の松」と名付けられた松の木があり、都内では最大級の黒松と言われている。二股に分かれた枝が見事な枝ぶりを見せる。上五の「朱夏や松」がきつぱりとしていてよい。

青梅は樹の精霊の色ならむ 秋山ユキ子

梅は梅雨のころ、みずみずしい浅みどりの芳香のある実を結ぶ。青梅は葉と同じ色なので目にくくじつと見ていると一つ二つと見えてくる。中々見えないところで青葉の茂みを透かして見える青梅の珠はこの他美しく、まるで精霊の色にも見えてきた。(以下略)

沖作品



能村研三選

夜濯や昇段決めし柔道着

千葉

古居 芳恵

晩照の富士は夏いろ濃むらさき

師の亡くて遠き警咳浮いてこい
娓娓として古文書解けぬ青しぐれ
いいことのおつて館蜜待ち合はず

市川市

茂呂 昇平

裏山の風のもてなす夏座敷
七つ星消して飛び立つてんとむし
大鳥居新樹の杜を抽んでる

鮒鮓や鳩の湖の香連れ届く
燕子花図の金地の余白夏来る

千葉

稗田 寿明

帆船の連なるやうな白菖蒲
信じたし短夜に見し夢なれば
訓練の放水はじめ虹立てり

夏帽の鏝の湾曲九十九里
名の太き出生届日の盛

海風にいよつや増す実梅かな

埼玉

須賀ゆかり

雨香る泰山木の花に触れ
潮入りの池の平らか夏の蝶

朱夏や松三百年の枝を張りぬ
平成の雨を溜めをり古代蓮
蔓四方へ螺髪となりぬ藤若葉

神奈川県

秋山ユキ子

青梅は樹の精霊の色ならむ
蔦青き子規の球場ノック音
神主の祓ふ大幣声涼し

列柱の暗みに神を夏真昼
目を外らす瞬に巢に入る親燕

市川市

溝呂木信子

羽衣のやうぼうたんのゆらぎかな
螢見やかすかな風と水の香と

涼しさや氣息流るる素描集
ゆるぎ麻を着る太古の風流れ